

恋と詩を 求めて

麻生良方

著者紹介 関東大震災の年(大正12年)東京駒込で生まる。父、故麻生久氏は社会主義運動の大先達せんたつ。開成中、早大文学部へと学び、自らの人生の場を文学に求め、詩作や小説に没頭した。戦後、社会主義運動に入り、浅沼秘書、民主社会主義連盟事務局長を経て、民社党結党に参画。昭和三十八年東京第一区より衆議院選に出馬、第二位で当選す。国会活動のかたわら、文学同人会「新現実」を主宰。新潮社同人雑誌賞なども受賞す。又油絵もよくし、朔日会同人でもある。他に、国際芸術見本市協合理事長。職場を明るく運動セクター理事長。若い根っこ会参与。著書に詩集『青薇薔』『社会主義をこう抱える』(社会思潮社)「俺の考えを生かせ」(池田書店)「心のものさし」(彩光社)等多数。

恋と詩を求めて

陽書
太選

昭和四十一年七月十日第一刷発行

定価 四〇〇円

著者 麻生 良 方

発行者 小川 嘉津 子

発行所 根っこ文庫太陽社

東京都港区赤坂青山北町6の40
青山 共 同 ビ ル
電話 (407) 八二六一一三

印刷 壮光舎印刷機
製本 共同製本機

著者との
申し合せ
により
印刷
略

麻生良方

恋と詩を求めて

序にかえて

『貴様はどこから生れてきたのだ』

と、だれかが私に問うなら、私は、微笑しながら、卒直に答えよう。

『うん。俺は、淫売窟と、女郎屋と、貧民窟と、それから、頽廢と、病毒と、醜惡と、絶望のどん底から生れてきたのだ』と。

.....

これは、私の父、麻生久の、自伝風の小説、『濁流に泳ぐ』の序文にでてくる言葉である。

私が、この小説を読んだ時は、中学二年の時であった。

それくらい、私は、つねに、人生に対する『自分の眼』をもとうとこころみるのだが、どういうわけか、『父の影』は、いつも、私の背後に、重苦しく、のしかぶさってきた。

私は、ともすれば、自分自身が、父の影の中にうずもれてしまうのではないか、という恐怖を感じた。

こうして、私は、必死になって、父の影から逃れようと、せいっぱいの努力をこころみた。

私が、あえて、この、自伝的な一文を、公けにしようと考えるはじめた第一の理由は、これによって、『父』という言葉に代表される、総てに対しての総決算をしたいという願いにほかならない。

x

x

x

話は別だが、一年ほど前、私は、ドイツのユダヤ人少女が、ヒトラーの迫害の日々の中に書き残した記録の一部を、或る雑誌で読んだ。

私は、この少女のたどたどしい文章の中に、少女の力をもってしては、さけることのできなかつた迫害の時代の中に、せいっぱい生きぬこうとした、彼女の、幼ない魂の呼吸に心をうたれた。

彼女のつかの間の人生は、迫害の否定の上にあつたのではなく、迫害そのものの中にあつたのである。

今、私は、ひそかに、戦争の中を生きぬいてきた自分をかえりみる。

あのいまわしい戦争の中で、いかに生きべきかに心を尽し、翻弄され、妥協しつつけて、かろうじて生きぬいてきた、私自身の惨めな姿を、もう一度、じっくりとみつめなおしてみたいと思った。

その中から、戦争の否定を、あらためて、考え直してみたくなった。

これが、この一文を、公けにしようと考えた、私の、第二の理由である。

x

x

x

私は今、一人でペンを走らせながら、『父と子』に結ばれた、不思議な宿命の糸について考える。四十年前、ちいさなわび住いで、母とむきあいながら、創作のペンを走らせた父の姿が、目の前に浮んでくる。

そして今、メーデーのデモの先頭に立ち、家に帰って、これを書きつづける自分自身をかえりみる。

父も逝き、母も逝った！

そして、この中でてくる、多くの先輩たちも、今は亡い！

大江日夜流る

逝く者かくの如し

それ 昼夜をわかつたず

父の書き残した一ふくの書の中に、私は、あらためて、人生の哀歓を知るのである。

昭和四一年初夏

下落合の偶居にて

麻生良方

窓と詩を求めて

目次

第一章 思春の頃

無産の子……………13

落第坊主……………17

ままごとの恋……………21

その頃の父……………24

姉の結婚……………28

逃げた蝶……………32

第二章 父の死とその前夜

第三章 文学少年

闘病……………	36
破局への道……………	39
故郷への旅……………	44
最後の焰……………	51
運命の日……………	56
終焉……………	64

第四章 青春の渦

めざめ……………	70
浪漫の旅……………	78
脂紛の巷……………	81
邂逅……………	87
最後の手紙……………	90

煉獄の表情

99

頽廢の詩

104

受胎告示

108

詩人の抗議

114

第五章 水晶の女

放浪

119

邪宗門

125

風立ちぬ

130

第六章 恋の美酒

靈泉寺温泉

137

恋の記録

143

小さな荷物

145

披露の宴

154

第七章 浪漫の詩ろうまん

友の門出……………153

処女詩集……………165

芭蕉会ばしょうかい……………171

第八章 伝統への摸索もさく

賈にせドンファン記……………179

詩人の目……………184

第九章 生命ある限り

戦士の影……………190

門出……………196

第十章 戦わざる兵隊

内務班	205
沼田の感傷	207
帰郷	213
編成	217
出動の日	222
敗戦	226
生きる	229

第一章 思春の頃

無産の子

麻田良夫は、子供の頃、無産党の闘士を父にもったということにたいして、なにか、うしろ暗い卑屈感をもちつづけていたようである。

彼の人生の記憶は、彼が四、五才の頃、中野にあった平野学の家に、彼の家族が同居していた頃からはじまる。

その頃の彼にニック・ネームは、『内井慶外みそ』という名で呼ばれていた。

「おまえの父ちゃん、無産党だろ」

とからかわれると、彼は、泣きべそをかいながら家にかけてこんだものだ。

その頃——昭和三年、麻田の父、麻田久は、既に、日労党という無産政党を結党して、その書記長に就任、栃木第一区より、はじめて衆議院選挙に立候補して、弾圧の中をたたかっていた。

選挙中、麻田は、一人中野の家に残されて、おたふく風に悩まされたことを、よく覚えてゐる。

その選挙に父が落選して間もなく、麻田一家は、平野さんの家を引きはらって、本郷林町の、ちいさな家に引き移った。

その頃、どういうものか、政党ごつことという遊びがはやったことがあった。

それは、無産党たる彼が、政友会や、民政党や、お巡りさんになるワン、パク、小僧たちに追いかけて、「無産党がつかまつたぞ」と、荒縄でうしろ手をしばれるという遊びであった。

麻田は、その遊びを彼等に強要される時程、みじめで、なさけないことはなかった。

そんなわけで、彼は、いつしらず、外で遊ぶことを好まず、もっぱら、家の中にいる、ひっこみじあんの子供として、育ったのである。

麻田が小学校に入るようになった頃、彼の家も、どうやら一軒の借家に住まえるようになった。

その家は、今でも本郷林町の一角に、古びた姿を保っているが、庭には、サルスベリやザクロや、アジサイが茂り、そのほか、縁日などで父や母が買い集めた、たくさん草花が茂っていた。

この頃が、父の五十の人生のうちで、もっとも、幸福にみちみちた時代であろう。胸に代議士のバッヂこそつけていなかったが、無産党の闘士として、その将来を約束され、家庭の中でも、母は若く美しく、また養女にきた恭子の存在も、ひとときは、はなやぎをそえていた。

彼は、そんな環境の中で、栃木から、二度目の立候補をしたが、次点で惜敗した。

この選挙における彼の人気はたいへんなもので、宇都宮の『ミヤマス座』という劇場で演説会をやった時、聴衆は場外にあふれ、窓という窓には、彼の顔を一目見んとする人々で鈴なりになったとい

う。

また、烏山の田舎で演説会を開いた時は、町の消防車が動員され、会場をとりまいた。その理由をたづねると、

「麻田久は、赤だ。火の玉だ。だから、いつ火事をだすかわからない。それで、消防車を出動させた」

と、答えたという。

あいた口がふさがらないが、当時の無産運動とは、まだまだ、そんな認識のもとにおこなわれていたのである。

その時の彼の選挙運動の母体は、足尾を中心とする鉱夫組合の人たちと、農民組合の連中であつたから、麻田の家には、しぜん足尾や、尾去沢や、北海道の鉱夫たちの出入りが、かなり多かった。

その中には、晩年、東京都議会の副議長になった高梨二男や、代議士になりながら、晩年不遇だった田中利勝や、今、栃木で市長をやっている、金子益太郎もいたし、後年、彼の選挙区のとをうけついで立候補し、当選とともに病で亡くなった石山寅吉などの人々がいた。

本郷の家に引越してから、間もなくのこと。麻田の家に、二、三人の、目の鋭い人たちがことわりなしに、玄関に入りこんできた。

「どなたでしゅうか」

と、母が応対すると、

「こういう者です」